

61. 「真の富」は心にある

医事万華鏡

11月中旬に入る

と、街はクリスマスに向けて美しいイルミネーションで彩られ始めます。子どもも大人も素直に喜び合えるクリスマスは、心

温まる冬最大のイベントと言えますね。

クリスマスと言えば、チャールズ・ディケンズの不朽の名作『クリスマス・キャロル』が想起されます。本作では、一人の老人がクリスマスの夜に体験する不思議な出来事を通して、人生の真の価値と人間愛の重要性を描いています。

物語は、主人公の老人・スクルージがクリスマス・キャロルを歌いに来た少年たちの寄付を渋るところから始まります。そのスクルージはロンドンの下町で商売をし、強欲かつエゴイスト、思いやりの微塵もない人物として人々に嫌われていました。その強欲ぶりは、7年前に亡くなった共同経営者のマーレイの葬儀においてもお布施を渋り、お金を持ち去るほどでした。

クリスマス前日の夜のこと、そのマーレイの亡霊がスクルージの前に姿を現します。マーレイの亡霊は金銭欲や物

欲に塗れた人間がいかに悲惨な末路を辿るか、

スクルージの生き方を修正すべく、3人の亡霊

が今から姿を現すということを言い残して消え

ました。そしてその3人の亡霊は、それぞれ「第

一の亡霊（過去）」「第二の亡霊（現在）」「第三

の亡霊（未来）」としてスクルージの前に姿を現し、彼のそ

れぞれの時期に関係した様々な光景を見せていきます。

三人の亡霊によって示された光景に衝撃を受けたスクルージは、これを機に改心の誓いを立て、三人の亡霊たちに感謝の意を示します。スクルージは新たな人生を歩み、人々への援助も進んでするようになりました。

『クリスマス・キャロル』は、人はいつからでも変われるという希望とともに、人の生き方と人間関係の真の価値について、深い教訓を与えてくれます。実際、金銭的な富だけを追い求め、利己的で孤独であったスクルージは、「人生は有限であり、お金では買えない人の優しさや愛、そして他者との温かい繋がりがこそが、私たちが真に幸福にする」ことに基づき、新たな人間へと生まれ変わりました。

翻って、医療も「キユア」から「ケア」へと移行しつつある時代。知識や技術に「人間性」というスパイスを加え、患者の人生全体を見つめる温かい眼差しを持つことの重要性が問われていけばこそ、「他者への共感」「人間性の回復」「命の価値」という『クリスマス・キャロル』のテーマは、医療従事者の役割や医療現場の在り方にも、重要な示唆を与えてくれているのではないのでしょうか。（JMS主幹・野村元久）

